



人妻女教師 美砂子

小説：筆祭競介

挿絵：終焉

リアルドリーム文庫 / PDF立ち読み版

序章	結婚報告……………	4
第一章	幸せに忍びよる影……………	11
第二章	捕われの新妻……………	41
第三章	裏切りの保健室……………	82
第四章	誘惑の個人面談……………	126
第五章	汚された修学旅行……………	160
第六章	制服を着た女教師……………	206
終章	夫……………	248



登場人物

Characters

秋月 美砂子

(あきづき みさこ)

二十五歳の数学教師。柔らかい物腰と理知的な美貌で同僚・教え子からの人気が高い。学生の頃から付き合っていた夫と結ばれ、むつまじい新婚生活を送る。旧姓・篠宮。

灰崎 靖幸

(はいざき やすゆき)

学園の物理教師で、美砂子のかつての恩師でもある。根暗な肥満男で、人を寄せつけず、美砂子が学生の頃から彼女に対して歪んだ愛情を抱いていた。

秋月 健司

(あきづき けんじ)

高校時代の美砂子の同級生で、長年互いに愛を育んだ末に結婚した現在の夫。自動車メーカー社長の息子で多忙な青年。将来的に美砂子が家庭に入ることを望んでいる。

「……目を醒ましてください灰崎先生。私が尊敬していた温和で優しいいつもの先生に戻ってください」

「もういいんだよ。僕に対する尊敬の念が強すぎて、師弟の間柄からなかなか踏み出せなかった君の気持ちはよくわかつている。その点については僕も深く反省しているんだ。僕はもう逃げないよ。君のために現実と闘うことにした」

駄目だ。何もかも自分の都合のいいようにしか捉えていない。学生時代から独善的な考え方の持ち主だと思っていたが、完全にそれが暴走している。数学や物理のマネアックすぎる話を、美砂子がウンザリして聞いていた事実が、彼の頭の中では愛弟子に対する熱心な指導へと塗り替えられているのだろう。

「さあ、本来の二人を取り戻そう。まずは誓いのキスからだ」

中年教師が迫ってきた。タラコ唇を突き出して贅肉に弛んだ顔が急接近してくる。ピンクチェアに拘束され逃げようのない女教師は慌てて顔を逸らした。悲鳴が喉元まで出かかるとか飲み込む。とにかく相手を刺激するのは得策ではない。

「うふふふ。そんなに恥ずかしいのかい。いいんだよ。ゆっくりと君が戸惑わないペースで、本来あるべき二人の関係を築いていこう」

灰崎はうっとりとした口調でそれだけ言うと、こちらの頬にブチュッと分厚い唇を

押し当ててきた。胸の内だけではとても収まりきれない強烈な嫌悪感に鳥肌が立つ。

——く、悔しいっ！

美砂子も女である。性的なことに関しては常に周りに気を配り、痴漢のような身体に直接コンタクトをされるような被害は受けたことがなかった。今までこの身体を性的な対象として触れた異性は、夫の健司だけである。それは貞淑な妻としての一つの誇りだった。それが今、こんなにも簡単に汚けがされてしまった。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。僕がちゃんとリードしてあげる。君が僕の生徒だったときみたいにね」

怒りに煮えるこちらの心中など完全に無視をして、灰崎が自分勝手なストーリーを語る。男の視線は女教師の背けた横顔から、その下にある半裸に移った。

「服を脱がしているときにね、この下着を剥ぎ取らないように自制するのが大変だったよ。でも僕は紳士だからね。勝手に女性の裸を見たりはしない」

無茶苦茶な言い分だった。それでは勝手に女性に女性の意識を奪い、服を脱がせて拘束する行為は紳士的だとも言うのだろうか。頬を唾液に汚された怒りと合わせ、灰崎に對する嫌悪感が天井知らずに跳ね上がる。それでも相手を刺激しないように、なんとか表情をコントロールした。が、その取り繕った頬がピクンと引き攣る。

「……………っ……………」

猫背のきつい肥満男がナイフを手にしたのだ。いくら気丈な性格をしていても、手足を拘束されたこの状況で、刃物をチラつかされてはとても平静ではいられない。

「ああっ。恐がる必要はないよ。僕が君を傷つけるわけないじゃないか。これは——
こうして使うために用意したただけだよ」

灰崎の右手がスツとこちらの胸元に伸ばされた。ナイフの刃先がブラの谷間部分に挿し込まれる。胸元に当たたる金属の冷たさにビクッと身体が震えた。それでも喉元まで迫り上がった悲鳴を咄嗟に飲み込む。

——ダメよ、冷静になるの。今、灰崎先生を——コイツを刺激するのはマズいわ。
もう目の前の男は自分の恩師でも、職場の先輩でもない。憎むべき陵辱者だ。

とにかく今の灰崎はまともではない。口でどんなことを言っているも、いつ態度が豹変し手にした凶器で自分を傷つけるかわからない。身体が自由が効かない今は、相手を刺激しないように注意して、隙を見せるのをジツと待つのが最善だ。引き攣りそうになる表情をなんとかニュートラルに保つ。

「そうだよ。脅えなくたっていい。ほら、怪我をしないようにジツとしてるんだよ」
物理教師はスツとナイフを引き、ブラジャーの横紐を切った。そのまま肩紐も切り

胸を包んでいた白い生地を剥ぎ取る。

「……おおっ」

男が感嘆の溜め息を漏らした。いつも眠そうにしている半眼が丸く見開かれている。美砂子はスレンダーな身体つきをしていた。縦にスツと通った形よいヘソを囲むように、薄く盛り上がっている腹筋。大理石を抉ったように括れたウエスト。二の腕も細く引き締まり、無駄肉のない見事なプロポーションをしている。それでいて女の象徴とも言うべき胸だけは、たつぷりと牝脂を蓄え豊かに実っていた。

灰崎の視線は今剥き出しになったばかりのその乳房に集中している。

「素晴らしい……本当に、す、素晴らしい……」

傾斜のあるピンクチェアに拘束されているため、バストは本来下方向に垂れるハズなのだが、ピチピチに張り詰めた乳肌によつて球形に近い見事な形を保っていた。横から見ても、前から見てもそのカーブに弛んだような乱れはなく、牝肉がぎっしりと詰まっていることが一目でわかる。頂点にはポリウム感満点の柔肉に比べ、かなり小振りな乳首がやはり面積の小さな乳暈とともに乗っていた。その鴉色は指先二本程度で簡単に隠れてしまいそうなミニサイズである。

「ま、まさか……」

それまで恍惚とした顔で、見事すぎる二つの膨らみを凝視していた中年男が、唐突にハツとした表情を浮かべた。慌てたように片手を胸に伸ばしてくる。

——くっ……これくらい……が、我慢するのよっ。

美砂子はグッと奥歯を噛み締めて、顔を横に逸らして辱めに備える。

太くて短いぶよつとした五本の指に左の乳房を驚掴まれた。まるでカブト虫の幼虫のような指が、掴んだバスの感触を確かめるようにワニワニと蠢き始める。自分の胸に深くめり込むその生暖かい感覚に、ゾゾツと嫌悪の鳥肌が立つ。

「ああっ……造りモノじゃない……。こんなに大きくて、形がいいのに……乳首がこんなに小さいのに……間違いなく天然モノだ……。ああっ、素晴らしい……」

片手で揉みしただくだけではあきたらず、両手でバスタを掴んできた。左の指を一杯に開き、まるで牝肉の大きさを確かめるように、タプタプと弄び始める。そして右の指は頂点の突起を責めてきた。親指、人差し指、中指の三本で三方向から摘み、手首を捻るようにしてキュッキュッキュと細かく扱いてくる。指先に込められている力加減が絶妙で、痛みを感じるようなことはなかった。ニップルから胸の奥に向かってピリッピリッとして官能のパルスが走り始める。

「……っ……くっ……っ……くふんっ！」

乳首責めが効果的とわかると左手も鶉色の頂点を摘んできた。人差し指で突起を包むように固定し、親指の腹を使ってズリズリと擦り上げてくる。感じまいと思っても、巧みな男の指責めに身体が反応してしまふ。健司以外の男とは経験がないだけに、無理矢理味わわされているこの快感を無視する術すべがわからない。せめて喘がないように、下唇を噛み締めるだけで精一杯だった。

「ああっ。そんなに必死な顔をして……。感じているのかい美砂子？ 恥ずかしがらずに素直に喘いでいいんだよ」

「灰崎がなめらかな口調で、自分のことを『美砂子』と呼んだ。その口調にどもりはまるでなく、常日頃から自分のことをそう呼んでいたような慣れすら感じる。結婚後の『秋月』先生という呼ばれ方よりも遥かに自然だ。

「だ、誰が感じているものですか——そ、そのいやらしい手をどけなさいっ！」
胸に対する辱めに加え、名前を呼び捨てにされた屈辱に耐えきれず、とうとう鋭い声で叫んでしまった。もうここまでできてこの陵辱者に敬語を使う必要などない。

しかし灰崎は気分を害した様子もなく、うっとりした顔をして美砂子の身体を弄り続けている。乳房を好きなように貪っていたブヨブヨの幼虫指が、とうとう他も蝕み始めた。小山のような胸に比べ薄さの目立つ腹部から、ウエストの鋭いくびれに至る

まで胸と交互に撫で回す。その範囲は二の腕から腋の下まで広がった。

——な、なんて……ねちっこい指使いなの……。

片手で腋の下から乳房の横、そしてウエストラインまでを、触れるか触れないかというギリギリの力加減で撫でていく。くすぐりたい一歩手前のゾクゾクつと背筋が粟立つような感覚に、思わず喘ぎ声が漏れそうになる。こんなにも絶妙な愛撫、健司にされたことはない。彼の場合、自分の好きなのところを好きなように触るだけだった。

灰崎は残りの片手で硬くなった乳房のコリをほぐすように、二本の指でゴシユゴシユと扱き上げてくる。同時にヘソの窪みをなぞるように指先で擦られたときには、背骨に響くような鋭い愉悅が迸った。夫の愛撫ではもたらされたことがない性感に、身体がじんわりと火照りだす。

「や、やめなさい……っ……やめっ……」

口から漏れる拒否の言葉が官能的に震えていた。視界の端には、大きく前を膨らませた男の股間が見えている。身の毛もよだつ光景だ。なのにプヨプヨとした指の動きに合わせて、人妻の女体はヒクンヒクンと甘く痙攣してしまふ。

「すぐく敏感な身体をしているね。それとも僕の愛撫がそんなに気持ちいいのかな」
優越感を帯びた男の言葉にぎりつと歯軋りする。悔しくつてたまらない。相手の言

動だけではなく、その愛撫に反応してしまう自分の身体も許せない。

陵辱者の両手は降下を続け、しなやかに引き締まった太腿の内側にまで達した。肉付きや弾力を確かめるような指の動きからなんとか逃れようとする。しかし両膝をベルトで固定されているため、開脚したまま腰をクイクイと突き出すような卑猥な動きしかできない。完全に逆効果だ。灰崎は誘われるようにM字開脚されている股間の前に膝をついた。唯一美砂子が身につけている白のショーツの正面に贅肉顔がくる。

「色気のないパンティだね。次からはもつと君に似合う、僕の用意したモノを穿かせてあげるよ」

「灰崎ははつきりと『次』と言った。正気の沙汰ではない。

「な、何をバカなことを言ってるの！ こんなバカげたこと二度とさせないわ！ 絶対に訴えてやる！ 次にあなたと会うときは裁判所よ！」

美砂子はそれだけ叫び、口を噤んだ。男の手に再びナイフが握られたからである。しかしそれは、こちらの言動に怒り握られたわけではないようだ。腰の部分に刃が入れられスツと引かれる。人妻の股間からあつけなく最後の衣服がハラリと落ちた。

「ああ。これが、美砂子の……全て……」

胸を露出させたときは丸く見開かれた半眼が、今度は眩しそうに細くなる。そのま

ま食い入るように股間を見詰められ、羞恥に頬が赤く染まった。女の嗜み^{たしな}として、夫のために陰毛を目立たない程度に切り揃えている。その黒い茂みが、灰崎の鼻息でそよぐほど近くで凝視されているのだ。

——ああつ……い、嫌あつ……。

両足がM字開脚されたまま革ベルトで拘束されているために、女の秘部を隠しようがない。艶やかに膨れた大陰唇は熟れた果実のようにぱっくりと開き、サーモンピンクの花弁たちが幾重にも重なって覗いている。その上で芽吹く陰核はつるりとしていて色艶もよく、その感度のよさが察せられた。膣襞の鮮やかな色づきは、愛する男にしっかりと磨かれ育った大人の女の証明だ。まさに人妻の華芯である。その入り口を見ただけで、夫を喜ばせるための複雑で濃密な奥の牝路が想像できた。

「なんて綺麗なおま○こなんだ。胸といっしょだ。こ、こんなにも素晴らしいのは初めて見た……まるで薔薇の花だ……信じられない」

「——僕が欲しいかい？」

灰崎はたっぷりと美砂子の股間を観察してから問いかけてきた。いつも下を向いている眠たそうな半眼が劣情にギラつき、ジッとこちらを見上げている。

「そんなわけないでしょ！ この変態！ 強姦男っ！ レイプ魔！」

相手を刺激してはまずいと思うが、もう我慢の限界だ。唯一自由になる口で淫欲に狂った同僚を罵倒する。しかし灰崎は美砂子の反撃に激昂することはなかった。目蓋が上がりきらないような重たげな半眼をスツと細めてタラコ唇を開く。

「僕は強姦なんて野蛮なことはいらない。君から求めてくるまで君を抱いたりしない」
啞然とする。ここまでしておいて何を言っているのだ。

「狂ってるわっ！ あなたは完全に狂ってる！」

物理教師は元教え子の叫びを無視して突然立ち上がり、背中を見せるとカチャカチャとベルトを弛めだした。シャツ、ズボンを脱ぎ捨ててブリーフ一枚の姿になる。そしてこの広い浴場の隅に置いてあった大きな手提げ鞆を持って再び振り返った。

——ううっ……なんて醜い身体なの……。

こちらに近づいてくる中年男の弛んだ半裸姿に、吐き気すら覚えた。

生白い身体はどこもかしこもブヨブヨと太り、だらしく肌が垂れている。肩の骨が不恰好に浮き出しているのは、男として必要な筋肉がまったくないためだろう。それでいて白いブリーフの前だけは力強くテントを張っていた。足を進めるたびに、全身の贅肉がダルンダルンと垂れ下がるのに、股間だけは真上に向かって雄々しく跳ね

回っている。

「待たせたね」

灰崎はM字開脚している美砂子の真正面に手提げ鞆を置くと、その中をまさぐり始めた。中から歯磨きチューブのようなものを取り出す。キャップを外し練り出し口のシールを剥がすと、別に取り出したプラスチック製の筒を嵌め込んだ。長さ約二十センチ、太さ二センチ程度の細長い棒である。チューブをぎゅつと絞り込むと、その先端にある小さな穴から、ピンク色をしたクリームがふにゅと溢れ出てきた。その光景が射精するペニスを連想させ、生理的なおぞましさを感じる。

灰崎はそれを確認すると、細長いプラスチックの棒を掴みスツと引き抜いた。筒状のカバーだったようで、中から一回り小さなステイックが現れる。さきほどの違いは、その棒の横にいくつか穴が空いているところだ。その全てがピンク色になっている。筒の中が空洞になっていて、そこにクリームが満たされているらしい。灰崎がグツとチューブを握ると、そのピンクの穴からプニュツとクリームが出てきた。

「な、なんなの……それは……」

美砂子の問いに灰崎は答えず、その得体の知れないアイテムをこちらの股間に向けてきた。筒カバーの内側には潤滑油のようなものが塗られていたようで、全面がヌラ

ヌラと光っている。生理的な恐怖に顔が引き攣った。

「いやっ……何をする気なのっ……いやっいやあつ——っひいいい！」

ぐぶんっ、と中に入ってきた。夫の男生殖器以外では初めての異物挿入だ。全身に鳥肌が立ち、嫌悪感から顔を大きく歪ませる。そんな美砂子に構わず、灰崎は目を細めゆつくりとそれを埋め込んできた。まるで医者が医療行為を行うような手際と落ち着きぶりに言い知れぬ寒気を感じる。

侵入を続ける冷たい異物を押し返そうと、膣壁たちがざわめくが、抵抗むなしくぐぐぐと埋まり込んでくる。まだ濡れてはいなかったが、事前に塗られていた粘液の効果で痛みもなく奥まで侵入を許してしまう。

「っ……くっつっ……どこまで腐ってるの……き、教師のクセに……自由を奪った女の身体を……っ……こんな玩具を使って辱めようだなんて——はくうっ！」

過去に経験したことがない違和感に人妻は大きく仰け反った。奥まで挿入具を埋めた灰崎が、手にしているチューブを絞り込みながら、それを回し始めたのだ。必然的に内容物が先ほど見た複数の小穴から溢れ出し、牝肉の狭間にたつぷりと塗り込まれていく。膣内で感じるクリームの冷たさに、腰の奥がビゲンと震えた。複雑に重なり合った膣壁の隅々にまでその冷たさが浸透してくる。陵辱者は女の入り口からピンク

色のクリームが溢れ出るまでチューブを絞り、それを引き抜いた。

「い、いまのは……なんだったの」

ひよつとしてピルの類だろうか。女教師の間に、中年男は口許を斜めにするだけで答えようとはしなかった。その手に今度は透明な容器が握られている。カキ氷のシロップ入れのようなソフトビニールだ。それを美砂子の胸の上で傾け、まさにカキ氷に蜜液をかけるように握り込んでくる。ネトツと粘度の高い透明な液体が注ぎ口から流れ落ちてきて、その冷たさに身震いした。

「これはローションだよ美砂子。君を喜ばせるためのアイテムさ」

灰崎が甘く囁くと、改めて片手をこちらに伸ばしてくる。たつぷりとローションが溜まっている胸の谷間にびちゃりと掌を浸すと、それを塗り伸ばし始めた。

ぬるるるんっ、ぬふるルっ、だぶるるるるんっ。

摩擦抵抗が極端に低くなった掌で、柔らかな乳房を好き勝手に弄ってくる。先ほどまでとは明らかに違う感覚だ。一杯に開かれた指の間で、絞り出された乳肉がなめらかにうねり、ニップルがヌルヌルと掌に擦られる。ローションを使った愛撫などこれが初めての経験だ。ブヨブヨの幼虫指が粘液まみれとなって、おぞましさが増しているハズなのに、ヌルみを伴う新鮮な感覚に乳首がガチガチに尖ってしまう。ゾクツゾ

クツと背筋が震え身体の火照りが増していく。それは紛れもなく性の快感だった。

「っ……くっ……っ……っ……」

憎き陵辱者にローションまみれのバストを弄られて喘ぎそうになっていた。涙が零れそうな屈辱だ。美砂子は下唇を強く噛み締めてそれに耐えていた。

「ああっ。ただでさえこんなにエッチなおっぱいが、こんなにテカテカと濡れ光って……美砂子は本当に罪な女だね。その知性だけでも僕のパートナーに相応ふさわしいというのに、こんなにもいやらし身体で僕を誘惑してくる」

中年教師はさらに潤滑液を垂らし、そのヌルみを全身に塗り伸ばし始めた。肘から腋の下を滑り、そのままウエストのくびれを撫で回す。ヘソに溜まったローションを指先で穿ほじり出し、形のいい腹筋の上を満遍なく照り光らせる。

柔らかく熟れた人妻のバストは、特にローションとの相性がいいようで男の手から解放されることがない。左右どちらかの掌が絶え間なく胸の盛り上がりを撫で回し、丸い乳肉をブルンブルンと淫らに変形させ続けている。腋から掬い上げるように揉みしだかれ、時折、乳肉の弾力を確かめるようにきつく握り締められた。

バストを中心に上半身をヌルヌルと愛撫され続け、背筋が粟立つような肉悦が滲み出す。明らかに全身が熱く火照り始めていた。

——あ、あれ？ 何っ、これ熱っ——。「……っ……っくは」

股間の違和感に大きく顔を俯かせた。身体の火照りに比例して、膣内に籠もったような疼きを感じる。こんな感覚、夫との行為では一度も経験したことがない。

——さつき……アソコに塗り込まれたクリームのせい？

どうやら媚薬効果のあるモノで、少なくともピルの類ではなさそうだ。膣内を中から燻^{いぶ}されているような熱気が湧き上がり、女体の芯がジワジワと肉悦に蝕まれていく。

「美砂子のアソコ、僕が欲しくってこんなにヒクヒクしているよ。ほら、僕が欲しいって素直に言っごらん」

片方のバストをふるんぷるんと掌で滑らせながら、こちらの股間を見詰めている。まるでもうこの乳房は自分のモノだと言わんばかりの気安い手付きと、そのセリフの内容にカッとなる。

「だれがそんなこと言うもんですか！」

叩きつけるように相手を一喝し、惚けた贅肉顔を睨みつけた。その迫力に灰崎が一瞬だけ脅えた表情を見せる。しかし、こちらが絶対に反撃できない状況であることを思い出したのか、すぐに不遜さと余裕を取り戻した。

「君のその気丈さは、昔からずつと気に入っているよ。でも、僕に対してだけは本当

の自分を晒してもいいんじゃないかな」

男は再び手提げ鞆に手を入れると、そこからウズラの卵のような白い物体を取り出した。その先にはコードがついていて、ボタンのついたスティックに繋がっている。その一つをカチリとオンにすると——ヴウウウウウツ。小さな振動音が聞こえてきた。「ローターを見るのも初めてみたいだね。たっぷりとこのスケベな身体に、この味を教えてあげるよ」

美砂子の内腿にそれを押し当ててきた——ヴツヴウウウウツ——身構えていたが、それほど責めではないようだ。どちらかと言えば心地よい振動である。女教師が内心ホツとした直後、灰崎がそれを内腿の広い範囲に這わせ始めた。

「……っ……っく」

振動部が動きだすと微妙に感じかたが変わってくる。執拗だったローション責めと膣内にたっぷり注入された媚薬との相乗効果で、身体が敏感になつてもいた。小刻みな責めを続けるローターを内腿に這わされると、くすぐったさにも似たゾワゾワする愉悅が広がり始める。こんな小さな振動なのにとても無視できない。官能の細波さいなみは両足を伝つて股間にも響き、牝褌の狭間に蜜液を溜めさせる。その責めに耐えるため、無意識に手首を拘束している革ベルトをグングンと引っ張っていた。

「グフフ。もうローターの味を覚えたみたいだね。太腿だけでそんなに気持ちいいの
かい。おま○このビラビラたちがさつき以上にヒクンヒクンしているよ」

顔が羞恥でカーツと赤くなる。動ける範囲だけでも腰を捻るようにして、陵辱教師
の視線から自分の恥部を隠そうとした。無駄な抵抗だということにはわかっていても、
生理的な嫌悪感でそうせずにはいられない。しかし男の左手によって太腿をピンクチ
ェアーに押しつけられると、すぐに元の姿勢に戻されてしまう。

「君はそんなに落ち着きのない生徒だったかな」

お仕置きだ、と元担任教師が呟いた直後、ローターが股間の牝芽に押し当てられた。
「っ……くっひっ!」

親指の先ほどの大きさしかない振動器に、米粒大のクリトリスが揺すぶられる。振
動の幅は肉眼ではほとんどわからないほど狭く小刻みだ。にもかかわらず、まるで全
身の快感神経を擦り上げられているような衝撃に襲われる。超音波めいたスピードで
陰核を揺すぶられ、稲妻のような快感が迸り大きく顎を仰け反らせた。

「あくっあっ……っひいっ、っあっあああああああっ!」

耐え続けていた喘ぎ声をととう大きく迸らせてしまう。ローターが牝芽に押しつ
けられている間、まるでスイッチの入った発生器のように人妻は仰け反り喘ぎ続けた。



唇からはだらしなく涎を垂れ流し、知的な美貌は涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっている。イキそうでイカせてもらえない状況の連続に、意識が朦朧としてきた。肛悦に爛れた頭に浮かぶのは、アナルアクメを決めることばかりである。

「さつきも言ったじゃないか。初夜の君をイカすのは、君と僕がココで初めて結ばれるときだって」

灰崎の舌がビクビクと痙攣している小穴をペロリと舐めた。

「はがああっ……そ、そんなあ……」

「素直におねだりできたご褒美に、さつきまでみたいないな意地悪はしないよ。ずっとこうしてペロペロ舐めてあげろ」

官能の汗でビタビタになっている女教師の全身から、絶頂直前の力みが消えると男は再び排泄孔を舐め始めた。先ほどのように深く抉り込まれる舌使いではなく、こちらよこちよと窄まりをくすぐるような這わせ方である。

ビグンツびぐぐんツビグびぐぐんツッ！

美砂子はその僅かな舌の動きだけで、全身を引きつけでも起こしたように震わせていた。絶頂感を味わえないまま連続してイッているような感覚だ。あるいは男のドライエクスタシーに似た状況なのかもしれない。

このままでは気が狂う。本当に廃人になる。かつて全国模試の数学でトップを取った頭が、己の肛門を弄られることしか考えられなくなっていた。

——あ、ああっ、お、おしりっ……おしりいい……。

もう恥も外聞もなく右手を己の股間に向かわせる。灰崎がしてくれないのなら、自分で自分を慰めるしかない。それは高性能な数学教師の頭脳による判断ではなく、淫欲に狂う牝の本能だった。しかし——パシン。アルコール中毒者のようにブルブルと震わせながら伸ばした細い指は、元担任教師のブヨブヨした幼虫指によってあっさりと叩き落とされてしまう。

「駄目だよ美砂子。君はいつからそんな手癖の悪い女になったんだい」

お仕置きだ、と言つて今度は尻をパシンと叩かれる。官能に茹だった牝尻にとつてその痛みはそのまま百パーセント、マゾの愉悦となつて臀部を貫いた。その衝撃にブシュッと小さく潮まで吹いてしまう。

「はがあっ……へはっ……へはああっ……」

いつたい自分はこのあとどうなつてしまうのか。灰崎なら本当に、このままアナルだけを朝までむしゃぶり続けることだろう。舌先の僅かな動きで他人の妻を喘がせいたぶる喜びに、狂つた中年男は耽溺していた。とても耐えられない。もう一秒だつて

我慢できない。気が狂う。いや、もうすでに狂っている。肉悦に全てが狂っている。

「お、おしりで……シテへえっ」

美砂子は搾り出すようにして、屈服の言葉を口にした。

ああ。でもこれで楽になれる。やっといクことができる。しかし――。

「美砂子、それが人にモノを頼む物言いかい？」

渴望している刺激は後ろの小穴に与えられなかった。

「はへっ……はっ……っ……な、なんでっ……もうっつ、もううううっ……」

「僕がどうしても君のこのはしたないケツ穴に、ペニスを嵌めたくなるように、もっとよく考えておねだりしなくちゃいけないよ」

精神の最深部まで、人妻を屈服させるつもりのような。涙がブワツと溢れだしたのが、屈辱のためなのか、身体の疼きのためなのかもうよくわからない。ただただ朦朧とした意識の中、浮かんだ言葉を口にする。

「あ、あなたの……ペニス、は……はがああっ……わ、わたしの、ア、アナルにつ、い、いれっつ、いれてくださいいいっ……」

思考の全てが満たされぬ肛門の疼きで一杯になっている。そんな爛れた脳裏に浮かんだセリフを口が勝手に紡いでいく。

「駄目だよ美砂子。もつともつとその優秀な頭脳をフル回転させて僕を求めろんだ」
あと僕のことには灰崎先生と呼ぶように、と言うと再び尻肉を両手で捏ね始めた。極限状態に追い込まれている女教師は、命令されるまま思考の全てを投入して男が喜びそうな淫語セリフを考える。

「は、はいぎき……せんせい……ぶつといガチガチおちんぽを……み、みさこの……エッチなおケツの穴に……ずつぶしハメハメしてくらさいい！」

力の入らなくなつた全身をガクガクブルブルさせながら絶叫する。その壮絶な姿に、ここまでねちつこく美砂子を責め続けていた男の欲情にも火をつけてしまったようだ。「ほら、なんでもかんでも先生に頼るんじゃない！ 僕が入れやすいように自分でケツ穴を広げなさい！」

元担任教師に言われるまま、両手を自分の尻に回した。上半身をベッドにつけたまま、己の尻肉を掴みグツと左右に引く。肛門を精一杯掻き開く。尻肉を力一杯伸ばしたため、普段空気に触れない皺孔の奥が剥き出しになってヒヤツとした。アナル周りは色素が薄目のローズピンクだが、奥は赤みの濃いワインレッドだ。そんな身体の奥の奥まで陵辱者の視線に晒している。

——もう、これであとは……ああつ、あと何をすればオチンポ入れてもらえるの！

おねだりポーズを取る自らの卑猥さに全身が沸騰する。それでもなお灰崎の挿入をせがむために桃色尻を左右に振った。一杯に開いた指の間で盛り上がる尻肉が、牡を誘うためにプルプルと淫らに揺れる。――効果は抜群だった。

「ああっ。なんてはしたない女なんだ！ ほらっ！ これかっ!! これが欲しいんだろ！ 言え！ ケツハメしてもらえるように、なんかエロいことを泣き叫べ！」

肛門に舌とは明らかに太さも熱さも硬さも違うものが押し当てられた。男根だ。膝立ちになった陵辱者は、己の剛直を人妻が一杯に開いている皺穴に擦りつけている。その熱さと硬さに女教師の全身は一瞬で燃え上がった。

「ココにいつ！ みさこのいやらしいケツマ○コにいいいつ、はいぎきせんせいのおつくてガチガチなおチンポをおつ、いちばんおくまでぶっさしてくらさいいつ！」

心の底から絶叫していた。言われるまま泣き叫んでいた。

「あああつ、美砂子おおつっ！」

灰崎の肉棒が侵入を開始した。長時間に渡るアナル責めでグズグズに舐め溶かされた括約筋には、入ってきてはいけない異物に抵抗するだけの力は残っていないかった。瘤のような肉先をずぶずぶとすんなり飲み込んでいく。欠片も痛みは感じなかった。異物が直腸内に侵入してくる内臓が震えるような違和感を感じたが、鮮烈すぎる肉悦

がそれを遙かに上回っている。

「あへええっ！ お、おしりっ、おしりにああっはいってあああああっっ！」

愉悅の汗でビタビタになっている乳房をベッドに押しつけたまま、顎を大きく反らして絶叫した。両目は丸く見開いているが、真後ろから挟り込んでくる未知の快感に網膜が白く灼かれ何も見えない。やっと与えられたアナルへの刺激に、全身の細胞が歡喜に震えている。

「うぐうああっ……す、凄いよ美砂子っ……やっぱりバージンだと凄くきつい……」
皺穴が丸く広がって男の亀頭をぐっぽりとその中に収めてしまった。ペニスで一番径の太い部分を飲み込んだだけに、あとの挿入はスムーズだ——ぬずるるるるんっ！
捻じ込むような力が入ったまま、腰をついていた灰崎の肉棒が一気に根元まで埋め込まれた。ビギビギに剛直した男根と、女性器と変わらない感度にまで引き上げられた肛門がギチギチに喰い込みあっている。その状況で男が腰を振り始めた。

「あがああっ！ お、おしりっがあっ……ら、らめっえっ——んほんほおおっ！」

舌や指とは比較にならない快感が迸った。まるでアナルの皺一本一本に肉悅の火花が散るような、壮絶な愉悅の摩擦感である。そして筋肉でできた排泄孔は、女性器とは比較にならない圧力で相手の肉棒を引き絞る。不浄の穴での交わりは、本来人が知

つてはならない快感を牡牝に等しくもたらした。

「おおおつつぶつぐがああああああああつ！」

両手で一杯に開いている尻タブがビグビグビクつと痙攣し、弛んだ贅肉腹にビタンと叩かれたその直後——ぶしやあああああああつ！

盛大に潮を吹いていた。尻を掲げている太腿が、膝をついてるのにガクガクと震え、この土下座の姿勢ですら維持するのが困難になっている。

渴望していた皺穴への一刺しは想像を遥かに越えていた。

「あぐあ……お、おけつ、ス、スゴつ……あへつあへおおおおあつ」

女教師の全身はアナルアクメに打ち震え、人妻としてのアイデンティティは崩壊し、高潔な精神は憎むべき陵辱者に完全に屈服した。

身体に力を入れたくても、背骨が小穴への一刺しで碎かれたようになっていた。男の唾液と自分の汗でヌルヌルになっている臀部は、ただでさえ肌理が細かくスベスベしているだけに両手がずると滑ってしまう。もう腕が上がらない。そのまま尻を掲げる姿勢を維持するために、ガクガクと震える全身を両手を使ってなんとか支える。

「す、凄いよ美砂子。初めてなのに、入れただけでも僕のチンポに馴染んでる。ああつ、君の感じている全てがチンポにビクビク響いてくるよ」

中年教師は崩れ落ちそうになって尻を吊り上げるように、両手で太腿の付け根あたりを引き上げた。

「ら、らめっ……もう……あぁっ……らめええっ——ひぐうっ！」

男が腰を引いた。ぎつちりと噛み合っていた牡肉によって、肛門が内側から捲られるように擦られる。まるで頑固な便秘時にお通じがあつたような、爽快感を伴う愉悅に身体の震えが止まらない。

グジュルッつずるるるるグヌヌヌヌヌッ！ ずるるるるるるグヌヌずるるるっ！

異物が押し入ってくる気が狂いそうになる肉悦と、ペニス引き戻されるときに感じる眉間に突き抜けるような快感。全身の細胞が灰崎とのアナルセックスで煮えくり返り、人妻の女体は快感一色に染め抜かれる。ベッドで擦れる乳首はこれ以上ないほど充血し、腰を支えている腹筋はうねるように痙攣していた。

——なんなのコレっ！ ただのセックスと全然ちがううっ！

そこは中のモノを外に出す排泄専用の肉器官だ。外から入っていいようにはできていない。そこに猛り狂う剛直がグボグボと出し入れされている。神経の末端が届く直腸を、生まれて初めて直接刺激され、性欲に湧き立つ脳味噌が快感のシグナルだけを激しく打ち鳴らす。

「んほおっひぐうっつ！ あぐあああつんほおおおおおおおおおっ！」

内臓を直接揺さぶられているような、どもった喘ぎ声が止まらない。

涙が。鼻水が。涎が。汗が。潮が。そして愛液が——美砂子の全身から体液という体液が垂れ流れていく。その渴きを癒すため直腸内の男根から肉汁をせがむように腰が動く。肉と肉を喰い込みあわせ激しく交わり捏ねくり合わせる。

「ああっ、根元はこんなにギチギチに僕のを咥え込んでくるのに、な、なかはヌルヌルでホカホカしててネバネバしてて……ああっ、ちんぽがとろけそうだあっ！」

陵辱者の声が興奮で上擦り、ねちっこかった動きが加速する。膣とは違い強く収縮する筋肉孔に。ペニスを引き絞られ、男の愉悦も極まっっていく。

びちゃんグちゃんびちゃんちゃんツッ！

でっぷり太った下腹と綺麗なハート形の牝尻がぶつかり合う湿った音が響き渡る。肉同士の衝突で本来は渴いた音のはずなのに、二人の汗と体液と唾液でぐちゃぐちゃになってるためにこんな音になっていた。その音の卑猥さが、さらに女教師の全身を官能の炎で燃え上がらせる。

「びぼぢいびいっ！ ケツマ○コずぶずぶぎぼぢいいいいっ！」

だらしなく開いた唇から涎を垂れ流し、感じたまま声を上げている。普段の知的で



上品な数学教師の面影は欠片もない。同じ屋根の下には、その教え子たちが眠っている。彼らを意識し当初は抑えていた喘ぎ声も、今では腹の底から迸らせていた。子供を教え導くはずの女教師は、肛悦に狂う一匹の牝獣と化している。

恥も外聞もかなぐり捨てた美砂子の喘ぎ声に、灰崎の動きも獣じみていく。

人妻の括れた腰を両手で握り締め、掲げられた尻を絶対には逃がさない形にすると、その丸みを破壊するように激しく下腹を叩きつけてきた。健康的に引き締まった太腿と、鋭く括れたウエスト。それだけに弛んだ下腹に激しく打たれ、タムタムとそこだけ弾む尻肉の丸みの動きは淫猥だった。それがますます男の獣欲を誘い、動きが小刻みになっていく。陵辱者も限界が近い。

「はいらぎぜんぜえええっ！ いぐうっいっしょにつああっいっしょにいぐうっ！」

この壮絶な官能を与えてくれているパートナーが、自分と同じように感じていることが実感できた。嬉しい。美砂子の全身は歓喜に震え、肛門を気持ちよくしてくれる肉棒をさらにきつく絞り上げる。この肉と肉の交わりは愛の営みとなんらかわらない。女教師のアナルは中での射精を一刻でも早くさせるように淫猥に蠢いている。対する男のペニスも歓喜に震え、人妻を墜とした征服感で力一杯に張り詰めていた。

「あああつ、すごっつ！ ち、ちんぽがちぎれるっ！ つはああつ！ みみ、美砂子

っ、い、いくぞっ！ ああっ、どこだっ！ どこでだして欲しいんだ！」

身体を内側からゴリゴリと擦り上げてくる男根が、今にもはちきれそうになっていた。灰崎の絶頂をこれまで、掌で、口内で、胸の谷間で、身体のあらゆるところに擦りつけられて知っている。その剛直具合で彼が射精寸前なのが初の肛門性交なのに、はつきりと認識できた。

「はへええっ、このままケツあなあ！ はいぎきしえんしええのなまぎーめんどプドプしてくらさいいいっ！ みさこのケツマ○コになかだししてへへええっ！」

心の底から絶叫する。肛門射精を哀願する。全ての感覚が性の肉悦に塗り潰されて美砂子大きく仰け反った。女性器からは熱い愛液を垂れ流し、アナルを窄める括約筋は独立した生き物のように中の肉棒をきつく啣え込んでいた。

——けんじよりもぜんぜんすごいっ！ ケツハメずぼずぼきもちいいっ！

アナルから響いてくる衝撃が、前の蜜壺からその奥にある子宮までも揺さぶって、夫相手のセックス以上に愛液を滴らせている。女盛りを極めた肉体は、イカせてくれない夫ではなく、絶頂の坩堝るつぼにこの熟れた女体を墜としてくれる中年男を選んでいた。連続してイキ続けながら、さらなる絶頂の大波を予感させる昂ぶりが牝尻の奥で発生している。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!